

現在主義的な時間の経過を信じる理由は存在するか？

氏名 梶本 尚敏(Naoyuki Kajimoto)

所属 シドニー大学

現代の分析形而上学における時間の哲学における主要な立場は大きく分けて、時間の経過が実在すると主張する A 理論と時間の経過は実在しないと主張する B 理論の 2 つに分けられる。A 理論と B 理論の間の論争は多岐にわたるが、A 理論の側からなされる論証は以下のような形式に一般化できる。

Indispensable Argument for Temporal Passage (IAPT)

- (1) 私たちはある問題 X を説明する必要がある。
- (2) X を説明できる唯一の方法は、時間の経過に訴えることのみである。
- (3) それゆえに、私たちは時間の経過を信じるべきであり、A 理論を信じるべきである。

X に当てはまる問題としては、(A) 様々な時間的非対称性の問題(何故時間的に非対称な現象が多く存在するのか)、(B) 時間的現象的意識の問題(何故我々は時間が経過するかのようを感じるのか(あるいは信じるのか)) (C) 時制的な信念の問題(「歯医者が昨日終わってよかった」のような時制的な信念を何故我々は持っているのか)の 3 つがあげられる。この IAPT に対し、B 理論者は主に(2)を退けることで、つまり上記の問題(A) (B) (C)に対して時間の経過に訴えない解決策を提示することで応答する。

本発表ではこうした B 理論からの応答の見込みを検討するのではなく、むしろ A 理論が本当に IAPT に訴えられるのかどうかを検討する。具体的には、本発表では(A)様々な時間的非対称性の問題に焦点を当てたうえで、A 理論の中で最も支持を集めている現在主義が IAPT に訴えられないことを示す。

本発表は以下のように進められる。まず現在主義的な時間の経過のモデルを明らかにしたうえで、このモデルを考慮すると現在主義者はそのままでは様々な時間的非対称性の問題を解決できないことを示す。次に、現在主義者はさらなる道具立てを導入することで様々な時間的非対称性の問題を解決できるものの、その際にはライバルである B 理論者も類似の道具立てに訴えることで様々な時間的非対称性の問題を解決できることを示す。以上の考察から、現在主義者は様々な時間的非対称性の問題に関しては IAPT に訴えられないと結論する。なお、時間があれば(B)時間的現象的意識の問題に関しても簡単に検討したい。